

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730501

研究課題名(和文) 対人認知の自動性に関する発達心理学的アプローチによる検討

研究課題名(英文) A developmental approach to the process of automatic social cognition

研究代表者

清水 由紀 (SHIMIZU, Yuki)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：30377006

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：自発的特性推論の発達過程について、子どもと成人を対象とした検討を行った。自発的特性推論とは、努力を要しないimplicitなプロセスであり、推論を行うようにという教示や目標がなくても生じる。先行研究では、成人を対象とした検討のみが行われており、その発達過程は明らかではなかった。

本研究では、誤再認パラダイムおよび再学習パラダイムを用いて、児童276名、中学1年生205名、成人390名を対象とした5つの実験を行った。その結果、自発的特性推論が遅くとも9歳から発達することが示された。また、STIはネガティブな特性を暗示する行動から生じやすいこと、その傾向は児童期からすでに見られることも示唆された。

研究成果の概要(英文)：The present study investigated the developmental process of spontaneous trait inferences (STIs) by comparing children and adults. STI is an effortless and implicit process and occurs even when people are not instructed to make such inferences and when people do not have an explicit goal of trait inference. Previous studies had investigated the occurrences of STIs only among adults, so the developmental process of STIs has not been clear.

In this study 276 fifth-graders, 205 seventh-graders, and 390 adults participated in five experiments using a false recognition paradigm and a relearning paradigm. The results suggested that STIs occurred from 9 years of age at the latest. In addition, it was indicated that STIs from behaviors that imply negative traits occur more frequently compared to STIs from behaviors that imply positive traits, and that this negativity effect was shown among children as well as adults.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：特性推論 対人認知 自動的処理 発達

1. 研究開始当初の背景

対人認知のプロセスは、これまで社会心理学において、特性推論や原因帰属、ステレオタイプといった観点から詳細に検討されてきた。特に、複雑で高次のプロセスも、実は自動的であることが示されてきている。近年では、意図せず、自動的・自発的に、他者の行動から特性を推論する自発的特性推論(Spontaneous Trait Inference; STI)のプロセスが報告されている (Uleman, Saribay, & Gonzalez, 2008)。しかし、成人を対象とした研究のみが行われてきたため、なぜSTIが生じるのか、どのようにして自発的・自動的になるのか、といった発達メカニズムについては、明らかにされてこなかった。

2. 研究の目的

実験的アプローチにより、STI の発達過程を明らかにすることを目的とする。同一のパラダイムを用いて子どもと成人を比較する。それにより、これまで同じく対人認知を扱っていながら、互いに別々に検討を行ってきた社会心理学的アプローチと発達心理学的アプローチを互いに補い、統合し、対人認知の包括的なモデルを提案することができる。

検討点(1): 子どもを対象とした STI の測定法を開発する。潜在記憶研究において用いられている手法を応用し、STI の測定法を開発する。

検討点(2): 開発した方法を用い、子どもと成人を対象として STI の発達プロセスを解明する。

検討点(3): ステレオタイプは、自発的特性推論の一形態であると言える。ポジティブかネガティブかといった特性価の影響を検討することにより、ネガティブなステレオタイプがどのように自動的に生起するのかについて、検討する。

以上を総合し、最終的に自動的な対人認知

の発達モデルを提案する。

3. 研究の方法

児童計 276 名、中学 1 年生 205 名、成人計 390 名を対象とし、5 つの実験を行った。潜在記憶の方法論(誤再認, 再学習)を応用し、子どもも対象とできる STI の測定法を開発した。

誤再認パラダイム(false recognition paradigm)は、個別面接により次のような手続きで行われる。(1)まず exposure phase: 多くの顔写真と行動記述文の対を参加者に提示する。このとき、行動記述文は、特性を暗示するもの(特性暗示文)と暗示しないもの(中立文)があった。(2)distracter phase: アナグラム課題を行ってもらい、参加者の短期記憶を混乱させるあるいは消去させる。(3)recognition phase: 顔写真と特性語の対を提示する。これは exposure phase と対応している。参加者は、recognition phase にて、特性語は先ほどの exposure phase で提示された行動記述文の中にあっただどうかを、yes か no で判別するよう求められる。基本的に正答は no であるが、もし行動記述文が提示された時点で自発的特性推論が生起していれば、参加者は特性語が含まれていたと誤再認しやすくなる。

再学習パラダイム(relearning paradigm)では、集団面接により次のような手続きで行われる。(1)exposure phase: 多くの顔写真と行動記述文のペアを呈示する。半数は特性暗示文、半数は特性を暗示しない中立文である。(2)distracter phase 1: 文章と顔写真の印象評定およびアナグラム課題を行ってもらった。(3)learning phase: 顔写真と特性語のペアを呈示した。Exposure phase において、同じ顔写真に対し、再学習試行では(特性語を含まない)特性暗示文がペアになっており、統制試行では中立文がペアになっていた。つまり、特性暗示文を読んだ時点で STI が生じていれば、learning

phase では再学習となるため記憶しやすいと考えられる。(4)distracter phase 2 : アナグラム課題を行ってもらった。(5)recall phase : 顔写真のみを呈示し, learning phase でペアになっていた特性語を回答してもらった。

いずれのパラダイムにおいても,最初に行動を観察した時点で STI が生じた場合,後の記憶に影響を及ぼすと予測されるため,最後のフェイズにおける正しい再認や再生の率が従属変数となった。なお児童に対し予備調査を行い,使用する手続きと材料が児童に適用可能かどうかを調べた上で,修正を行った。

最終的に作成した方法を用い, STI における成人と子どもの違いについて,特性価(ポジティブ vs.ネガティブ)や日常生活で観察する行動の頻度(高頻度 vs.低頻度)による違いの観点から検討を行った。また, STI が,どの程度自動的プロセスと統制的プロセスに依存するのかについて, PDP 分析(Process Dissociation Procedure Analysis)を用いて検討した。

4 . 研究成果

検討点(1) : STI の測定法としての誤再認パラダイムおよび再学習パラダイムを児童に適用可能なものへと改良し,新たな方法を開発した。手続きおよび材料等は, 3 に記載の通りである。

検討点(2)および(3):誤再認パラダイムおよび再学習パラダイムを用い,小学5年生,中学1年生と成人における STI の生起,およびそこに影響する要因について検討した。なお,幼児においても予備実験を行ったが,特性を表す語彙が少なく自発的特性推論の生起を児童以降の対象者と直接比較するのは困難であることが判明したため,小学5年生および中学1年生のみを対象とした。他者のポジティブな特性を暗示する行動記述文と,ネガ

ティブな特性を暗示する行動記述文では,提示されたときに特性が自発的に推論される傾向が異なるかどうかを調べた。その結果,成人のみならず小学5年生および中学1年生においても, STI は十分観察されること,ただしネガティブな特性を暗示する行動記述文を提示したときのみ生じることが明らかになった。

また,特性価(ポジティブ・ネガティブ)×頻度(高頻度・低頻度)の4パターンの刺激を用い,暗示される行動がポジティブかネガティブかといった特性価の要因と,日常で高い頻度で観察されやすいステレオタイプの行動かほとんど観察されない行動かといった頻度の要因では,いずれが STI の生起に大きな影響を与えるのかについて検討した。その結果,特性価の要因は,年齢にかかわらず STI に対して大きな影響を与え,これまでの知見と一致してネガティブ特性を暗示する行動からの方が,ポジティブ特性を暗示する行動からよりも, STI を生じやすいことが明らかになった。一方で,日常で観察される行動の頻度が高いか低いかという要因は, STI の生起に影響を与えないことが示唆された。ネガティブバイアスに関する研究ではしばしば,特性価ではなく起こりやすさという代替要因によって,その現象が説明されうると考えられてきたが,起こりやすさの要因は STI には影響しないことが示唆された。ネガティブなステレオタイプは,その行動が日常であまり観察されない,頻度の低いものだからではなく,瞬時に判断されるネガティブ要素そのものにより生じされることが示唆された。

さらに, PDP 分析という手法(Payne,2005)を用い, STI における自動的プロセスと統制的プロセスのパラメータを推定した。その結果, STI の生起がには,自動的プロセスのみならず統制的プロセスも寄与していることが示唆された。アメリカ人を対象とした先行

研究では，STI への自動的プロセスの寄与が大きいことが示唆されていることから，STI がどの程度自動的であるかには文化差がある可能性が示された。

最終的に，まずはネガティブな特性から STI が生起し，その後次第にポジティブな特性から STI が生起するプロセスを記述した発達モデルを構築した。ただし，日本人成人において STI の生起が統制的プロセスにも依存していることが示唆されたことから，今後はさらに，文化の要因も取り入れた形での発達モデルの構築が必要であると考えられる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

清水由紀 (2012). 児童・生徒の発達研究の動向. *教育心理学年報*, 査読有, **51**, 11-21.

Shimizu, Y. (2012). Spontaneous trait inferences among Japanese children and adults: a developmental approach. *Asian Journal of Social Psychology*. 査読有, **15**, 112-121.

清水由紀 (2011) 子どもの「いい人」「悪い人」の判断 - 他者との関係づくりを促す性格の推論 - . 発達, 査読無し, **127**, 11-17. ミネルヴァ書房.

清水由紀(2010) 幼児・児童は危険回避行動と向社会的行動のいずれを優先させるか：安全教育のデザインのための基礎的研究. *発達心理学研究*, 査読有, **21**, 322-331.

清水由紀(2010) 小中学生と大学生における自発的特性推論. *心理学研究*, 査読有, **81**, 462 - 470.

〔学会発表〕(計 10 件)

Kristina Nand, Takahiko Masuda, Yuki Shimizu, & kira Takada (2014) Cultural similarity and variations in emotion judgment styles: cross-cultural examination of European Canadian and Japanese children's context sensitivity. 15th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Poster Session,. (2014 年 2 月 15 日, Austin, USA).

Yuki Shimizu (2013) Children's sociality is cultivated through communication with others. 8th Biyani's international conference (2013 年 9 月 26 日, Jaipur, India).

中村優樹・清水由紀 (2013) 二次的意図の理解と道徳判断の関連. 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, p.102. (2013 年 9 月 11 日, 法政大学)

Yuki Shimizu, Hajin Lee, & James S. Uleman (2013) Cultural differences in spontaneous trait inference: Comparing automatic and controlled processes. APA(American Psychological Association) 121st annual convention, Poster Session. (2013 年 8 月 2 日, Honolulu, USA).

清水由紀, Hajin Lee, James S. Uleman(2012) 自発的特性推論における日本人とアメリカ人大学生の比較. 教育心理学会. 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集.(2012 年 11 月 24 日, 琉球大学)

清水由紀(2012) 他者のネガティブ特性を語ると転移されやすいか? - 5 年生と大学生における自発的特性転移の検討. 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 2AMB16. (2012

年9月12日, 専修大学)

Yuki Shimizu & Hitomi Nishikori (2012). Do children understand that appearances can be deceiving? : Preschool children's use of trait labels versus appearance information in behavior predictions. 22th Biennial ISSBD(International Society for the Study of Behavioural Development) Meeting, Poster Session. (2012年7月9日, Edmonton, CANADA).

Yuki Shimizu (2012) Spontaneous trait transference among Japanese children and adults. 13th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Poster Session, (2012年1月28日, San Diego, USA).

Yuki Shimizu (2011) The development of trait inference among Japanese children: Do they understand the causal relationship between motives and traits? Society for Research in Child Development Biennial Meeting, Poster presentation, (2011年3月31日, Montreal, Quebec, CANADA).

Yuki Shimizu (2011) Spontaneous trait inferences among Japanese 5th-, 7th-, and university students. 12th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Poster Session, (2011年1月29日, San Antonio, USA).

〔図書〕(計4件)

清水由紀・林創 (2012) 他者とかかわる心の発達心理学 - 子どもの社会性はどのように育つか - . 金子書房. 215 ページ.

清水由紀 編著 (2010) 学校と子ども理解

の心理学. 金子書房. 157 ページ.

清水由紀 (2010) 子どもは自分をどのようにとらえているか, 子どもにとっての「いい人」「悪い人」とは, 向社会性はどのように発達するか, 「危険の回避」と「人助け」子どもはどちらを取るか. 内田伸子・袖井孝子編 子どもの暮らしの安全・安心～命の教育へ1: 乳幼児期から小学校入学まで. 142 ページ (pp.33-35, 53-64). 金子書房.

清水由紀 (2010) 児童期初期～後期における自己概念・向社会性の発達, 危険回避と向社会性のジレンマをどう解決するか, 子どもの安全にかかわる対策とは. 袖井孝子・内田伸子編 子どもの暮らしの安全・安心～命の教育へ2: 児童期から青年期にかけて. 147 ページ(pp.18-23, 29-34, 86-87). 金子書房.

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
清水 由紀 (SHIMIZU, Yuki)
埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号: 30377006

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：